博士学位論文審査報告書

申請者氏名:　滝口　明子

論文題目:　「欧米茶書の比較文化史的研究
—イギリス茶文化の形成と紅茶論争—」

学位の種類:　論文博士(乙)　博士(アジア地域研究)

論文審査委員:　(主査)　石田　英明

(副査)　篠田　隆

(副査)　中井　章子

(青山学院女子短期大学教授)

滝口明子　博士論文　審査報告書

1　論文審査の過程

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

提出論文は「アジア地域研究科学位（課程博士、論文博士）に関する細則」（2008年2月20日）に基づき、2013年10月1日～14日の2週間にわたって事前開示された後、同10月30日に本申請が行われた。同11月12日に開催されたアジア地域研究科委員会において申請の受理が承認され、審査委員（内部2名、外部1名）が選出され、承認された。これを受け、同11月20日に学長決済がなされた。

審査委員は提出された論文を精査のうえ、第1回審査委員会を2014年1月11日に、第2回審査委員会を同1月28日に開催し、博士論文として適格かどうかの審査を行った。博士論文として適格であることを確認したうえで、同1月28日午後2時から4時まで、東松山校舎管理棟第3会議室において、最終試験として公開による口述試験を実施した。

2　論文の要旨

本論文（「欧米茶書の比較文化史的研究—イギリス茶文化の形成と紅茶論争—」）は、17～18 世紀のヨーロッパにおける茶文化の形成過程を、おもに文献や絵画の研究をとおして明らかにすることを目的としている。論文はまずヨーロッパへの茶の伝播と反応を 17 世紀ヨーロッパの三人の医師の茶論を通して説明する。次いでイギリスにおける流行の変遷を分析して、茶文化の受容が宮廷やコーヒーハウスから、18 世紀初頭には一般庶民にまで広まるようになったこと、特に市民階級の家庭が茶文化の受容に最も大きな役割を果たしたことを資料により明らかにしている。次に、茶の是非をめぐって行われた紅茶論争の内容を、18 世紀中頃までの代表的な論説を例に挙げて検討している。茶文化の形成には茶道具やティーカップの役割も大きいが、その発展の道のりを、18 世紀後半に躍進したウェッジウッド社を例に挙げて跡付けている。最後は、18 世紀末に紅茶論争を終結させたレットサムの著書の考察で本論文を締めくくっている。

本論文は、序論、本論の第１章から第７章、附録、結論、図版、図版目録、文献目録により構成されている。その構成は以下のとおりである。

序論
本論
はじめに
第１章　初期の茶論
　１．茶の起源
　２．まずオランダへ
　３．ヨーロッパの茶論
【附論】
　【附論１】欧米茶書の中の東洋：シモン・パウリ『煙草・茶論』研究
　　１．はじめに
　　２．著者とテクストについて
　　３．煙草論
　　４．茶論
　　５．おわりに
　　６．附録
　【附論２】欧米茶書の中の東洋：ボンテクー『茶論』研究
　　１．はじめに
　　２．著者ボンテクーについて

３．『茶論』（1678）の構成と内容
４．考察と結論
５．おわりに
【附論３】ニコラ・ド・ブレニーの茶論：17 世紀後半のフランスにおける茶の医学的意味について
１．ブレニーの生涯と著作について
２．茶論の内容
３．ブレニーの茶論の位置：同時代の医療と茶の医学史の中で
第２章　イギリス上陸　宮廷から庶民へ
１．宮廷での流行
２．家庭に広がる飲茶
第３章　紅茶論争のはじまり
１．流行から定着へ
２．ショート博士の新・茶論
第４章　紅茶反対論
１．社会現象としての茶の習慣
２．ハンウェイの反茶論
第５章　それでもお茶会は楽しい
１．ジョンソン博士反論す
２．茶の流通
３．それでもお茶会は楽しい
第６章　ジョサイア・ウェッジウッドの世界
１．茶道具の楽しみ
２．ウェッジウッドの登場
第７章　茶論争の終結
１．科学的な研究書
２．茶の実験
【附録】
【附録１】『茶の博物誌：茶樹と喫茶についての考察』　翻訳並びに解説
訳者序文
原著はしがき
原著序文（1772 年版への序文）
第１部　茶樹の自然誌

第２部　茶の医学誌

解説

文献表

【附録２】『茶の文化史：英国初期文献集成』別冊日本語解説

１．所収 22 文書　一覧

２．著作とその著者について－内容と解題－

【結論】

【図版】

【図版目録】

【文献目録】

序論では、論文の目的、研究史、構成と内容の３つに分けて述べている。論文の目的は、17～18 世紀ヨーロッパにおける茶文化の形成過程を、茶書を中心とする文献や絵画の研究をとおして明らかにすることとしている。その目的を達成するために、ヨーロッパに伝わった茶が、特に 18 世紀のイギリスにおいて 100 年ほどの間に広く普及した背景、1750 年代の紅茶論争の内容、アジアの茶文化との相違などの問題を 17、18 世紀のヨーロッパの資料により考察することとしている。研究史では、ヨーロッパの茶文化研究には一貫した研究史が存在しないとした上で、ユーカースの『茶のすべて』の重要性と今後の課題を指摘し、日本の諸研究、欧米の茶に関する経済史、貿易史、社会史、文化史など幅広い分野の先行研究文献を紹介している。構成と内容に触れた後、欧米茶書の歴史的位置づけと紅茶論争の再評価によって、本論文がイギリスおよびヨーロッパにおける茶文化形成の史的研究に寄与する試みであるとしている。

本論では、はじめにの項で、本論文が扱う茶論争は 17～18 世紀のヨーロッパとイギリスで茶文化が定着する時期のもので、紅茶の起源等に関する論争とは別物であること、また、受容の過程で現れた様々な反応からヨーロッパ文化の個性を探り、近代ヨーロッパの形成に世界の他地域が与えた影響を茶の研究を通して明らかにできればよいと述べている。

第１章では、茶の起源と発展について中国、日本の記述を紹介したあと、17 世紀に、ヨーロッパでいち早く茶に注目したオランダの医師ボンテクーの茶論を紹介し、次いでフランス人の茶論、オランダ東インド会社の医師ケンペルの『日本の茶の話』にも言及する。附論として、17 世紀にデンマークで活躍した医師シモン・パウリの『煙草・

茶論』、ボンテクーの『茶論』、フランスの医師ニコラ・ド・ブレニーの茶論を、それぞれ考察している。シモン・パウリは茶に反対し、ヨーロッパの植物で代用できるとしている。ボンテクーは個人的経験も交え、医学的・科学的見地から茶の効用を説き、ブレニーも茶の効用を説いた。

第２章では、17 世紀初頭に茶がイギリスにもたらされてから、宮廷、コーヒーハウスへと徐々に広まり、同世紀末頃には市民階級の家庭でも好まれるようになった歴史をサミュエル・ピープスの日記やエッセイ紙『スペクテーター』の記事などによって考察している。ヨーロッパの歴史上初めて、酒類以外に、衛生的で誰でも日常的に楽しめる飲み物となった茶がイギリスで普及したのは、市民階級の家庭のティーテーブルを主催した女主人たちに茶が好まれたことが大きかったとしている。

第３章では、18 世紀前半に行われた初期の紅茶論争を概観し、代表的な論客トーマス・ショートの茶論を中心に考察している。喫茶の風習が急速に広がった 18 世紀中頃のイギリスで、喫茶の是非をめぐっていわゆる紅茶論争が起こったが、1730 年と 1750 年の２度にわたって発表されたショートの茶論を通して、喫茶の習慣がイギリス社会に定着したことが分かる。

第４章では、18 世紀半ばに多く見られた紅茶反対論に焦点を当てている。17 世紀の茶論では医学的見地から茶の是非を論じるものが多かったのに対し、18 世紀中頃になると健康に有害とする他に、金と時間の無駄であるとか、国を滅ぼす基になるなど経済的社会的見地からも茶に反対する意見が登場した。反対意見の代表的な例として、宗教家ジョン・ウェスレイと慈善家ハンウェイの見解について考察している。

第５章では、前章のハンウェイに反論して、喫茶の習慣を健康や社会生活の側面から擁護したジョンソン博士の意見について考察し、市民階級に茶会が流行していく様子を当時の絵画資料などからも検証している。

第６章では、中国や日本から伝わった茶道具や陶磁器への関心が高まったことを受けてヨーロッパで陶磁器の生産が始まったことを跡付けている。章の後半はイギリスのウェッジウッドに焦点を当て、その成功への道のりを考察している。

第７章では、1772 年に医師レットサムが博物的側面と医学的側面から茶を論じて、

紅茶論争を終結に導いた『茶の博物誌』に基づき、18 世紀末頃の茶をめぐるイギリスの状況を考察している。

本論の後に２点の附録が付けられている。附録１は第７章の主たる資料であるレットサムの『茶の博物誌：茶樹と喫茶についての考察』の全訳と解説である。附録２は『茶の文化史：英国初期文献集成』別冊日本語解説と題するもので、イギリスで 1682 年から 1799 年までに発表された茶に関する英文の論文、詩、手紙、翻訳など本論文が引用または言及したもののうち重要な 22 の文書の一覧と解題である。

結論の章では、結論と展望の２つに分けて論じている。結論は次の３点にまとめられている。1）17～18 世紀のヨーロッパの茶論について、系統的な研究の端緒を開くことができた。また、茶論の比較研究により、各茶論の文化史上の意義を考察した。さらに、同時期のヨーロッパの自然学、医薬思想、植物学、博物学等に関する新たな研究の可能性に言及した。2）18 世紀中葉のイギリスの茶論争について、異文化受容の問題としてとらえると、「拒否反応が起こるのは、一部の上流階級に流行しているときではなく、中流以下の一般大衆に普及し始めるときである」という命題で表現できるとした。さらに異文化受容に対する反対論や拒否反応に、その時代の人の真情や常識、無意識などが表れやすく、「拒否反応」に注目する方法は文化研究全般に有効な方法となるのではないかとしている。3）イギリス茶文化の特質について、茶は男女そろって楽しめる飲み物で、茶文化は市民階級の家庭の女性が担う形で発展した点に特徴があるとしている。今後の課題の展望として次の３点にまとめている。1）欧米茶書の系統的研究により、欧米人の茶に対する見方だけでなく、アジア文明全体に対する認識を解明することをめざす。2）日常生活における茶の実態や茶の意味に関する研究として、美術や文学から茶の表象と表現を取り出して意味を考察する。そのための実例を集める作業を行う。3）日本、中国、アジア諸地域の茶文化と比較して、欧米茶文化の特質を明らかにし、アジアがヨーロッパ文化形成に与えた影響を探る。

3　論文の特色および評価

審査委員会は本論文を審査するにあたって、問題意識、論文構成、論理性、独創性、実証性、将来性などの諸観点から申請者の学問的貢献について総合的に評価することにした。この基準にしたがって審査をした結果、以下のような評価を得た。

本論文のもっとも重要な学問的貢献は、17～18 世紀のイギリスにおける茶文化形成の過程を当時の文献を丁寧に読み解くことによって明らかにしたことである。ヨーロ

ッパの茶文化に関する一貫した研究史が特に確立されていない状況において、重要な文献を選び出し正しく読解する作業が研究の基本となるが、それを申請者は着実にこなしている。また、資料として文献以外に当時の絵画、茶道具なども援用して分析と考察に広がりと深みをもたらしている点も高く評価できる。文献と資料から申請者は茶をめぐる論争には、茶が健康に良いかを中心に医師らが行った論争と、特にイギリスにおいて 18 世紀中頃に展開された喫茶の社会的経済的影響も含めて論じる論争という二つの山があったと分析している。この分析に実証性を与えるため、申請者は第1章に附論として 17 世紀のフランス、オランダの代表的な3つの論文を紹介して考察し、さらに論文の末尾には附録としてイギリスの「紅茶論争」に一定の決着を与えた 18 世紀末のレットサムの論文の全訳と解説を付けている。こうした附論と附録により、考察と分析に実証性と具体性を与えた点も評価できる。

イギリスで茶文化が普及したことについて、本論文では宮廷とコーヒーハウスの役割を指摘したあと、「イギリスにおける茶の普及と定着の鍵を握り、茶文化創造の主な担い手となったのは市民階級の家庭のティーテーブルとその主宰者たる女主人（主婦たち）だった」とテーゼ化している。酔いをもたらすことなく健康的で楽しい雰囲気を作り出す飲み物として特に女性から支持されたことがイギリスでの茶文化定着に大きな役割を果たしたという本論文の分析は、女性文化論やジェンダーの問題ともからめて英国の生活文化史研究の観点から重要な考察となっている。また茶の受容がもたらしたヨーロッパ人の食生活や医学的常識の変化も視野に入れていて、生活文化研究を幅広く捉えている点も評価できる。

茶に反対する論説について、本論文はその内容を時代的社会的背景との関わりで分析し、反対論や拒否反応の中に異文化を受容する側の文化の本質が見える場合があるという観点から当時のヨーロッパやイギリスの文化、社会の特徴を理解しようとして、比較文化研究の一つの方法を示した点も高く評価できる。賛成論、反対論のいずれにおいても実験による実証性を求めているところにヨーロッパ人の論理の科学性が見える一方で、特に反対論において、アジアの文物や文化に対する非科学的な偏見が見られることも指摘している。また、18 世紀中頃のイギリスで展開された反対論には、喫茶の習慣が一般大衆に及んでいることと、産業革命につながるイギリスの社会変動、階級問題、生活環境の変化などの反映が見られることが指摘されており、本論文が比較文化史的研究にとどまらず広い分野の研究とつながる可能性を有していることを示している。

本論文は茶がアジア発の文化であることから、アジア文化とヨーロッパ文化の比較という観点にも配慮しており、茶文化を受容したヨーロッパの研究がアジア研究にも

直結していることを示した点も評価できる。

本論文は資料として主に英語の文献を使用しているが、フランス語、ドイツ語の文献も使用され、申請者の高い語学力が発揮されている。これによりイギリス文化のみならず広くヨーロッパ文化を視野に入れて研究することが可能になったことも本論文の価値を高めている。申請者は東京大学教養学部教養学科においてフランスとイギリスそれぞれの専攻で二つの教養学士号を取得したほか、長年英語教育に従事してきた。口述試験において、英語とフランス語の文献活用の詳細についての質疑応答を行い、申請者が研究者として英語とフランス語の高い運用能力をもつことが確認できた。

本論文は以上のような長所が認められる一方で、いくつかの問題点や課題もある。審査委員から出された指摘を以下に示す。

（1）論文名が「欧米茶書の比較文化史的研究」となっているので、なぜイギリスのみで突出した茶文化が形成されたのかについて言及する必要があった。また、産業革命を迎えたイギリスの社会変化の中で、産業革命の文化史という観点から茶文化の定着過程を探る分析も必要であった。

（2）砂糖とミルクはイギリスの茶文化に不可欠な食材となっているので、これらの食材の研究史にも踏み込み、茶文化形成にどのように組み込まれていったのかの分析が欲しかった。

（3）「異なる地域からの新しい物産や風習が、伝播し定着する過程で、拒否反応が起こるのは、それが一部の上流階級に流行しているときではなく、中流以下の一般大衆に普及し始めるときである」ということを異文化受容の命題としているが、他にどういう例があるのか、ヨーロッパ以外の地域ではどうであったのかを合わせて提示する必要があった。

（4）イギリスで茶文化の定着に家庭の女主人が大きな役割を果たしたとなっているが、これはイギリスの家庭における女性の地位、役割とどう関わっているのか、ジェンダーと生活文化の問題とからめたより深い分析が望ましかった。また茶文化の形成にコーヒーハウスなど家庭外の場が果たした役割についても更なる考察が必要であった。

本論文は、以上のような問題点や課題を残しているが、ヨーロッパやイギリスの茶文化研究に道筋を付けて研究史に新たな展望をもたらしたこと、原典や図像資料を駆使して丁寧に論証していること、生活文化研究と比較文化研究を融合させてイギリス

文化の特質を多方面から分析する独創性のある研究方法を採用していることなど、この分野の研究の将来性を十分に期待させる内容となっている。

4　結論

以上の論文審査結果および口述試験の内容を総合して、本審査委員会は、学位論文申請者滝口明子氏が十分な実力を備えた研究者であると判断し、全員一致で博士（アジア地域研究）の学位を授与されるに適格であると認めた。